

デザインの力で 社会の問題を解決したい

●デザイナー 高橋正実さん

高橋さんは、子どものころから工場に出入りし、モノづくりの現場を熟知しているデザイナーです。これまでにない発想で考案したアイデアを提案し、生産現場を元気にするとともに、デザインの力で社会問題の解決を図ろうとしています。その仕事は様々な分野に及び、これまでのデザイナーというイメージの枠には収まりません。



たかはし・まさみ ●東京都墨田区生まれ。子どものころから近くの工場に出入りし、モノづくりの現場を見ながら育つ。高校生のときには、自分のアイデアを工場に提供していた。高校卒業後、桑沢デザイン研究所に入学。同研究所卒業後、デザイン事務所勤務を経て独立。現在MASAMI DESIGNを主宰。日本パッケージ大賞2005特別賞など様々な賞を受賞。デザイナーとして初めて、小学生の教科書にも登場している。著書に『工場へ行こう!! デザインを広げる特殊印刷の現場』がある。

モノづくりに囲まれて育ち、
斬新なアイデアを生み出す

——どんなきっかけでデザイナーになろうと思ったのですか。

高橋 子どもころ、よく母や祖母に連れられて銀座に買い物に行きました。そのときに見たショーウィンドウディスプレイが、とても素敵で気持ちよくワクワクしました。そしてこんな素敵なモノをつくるのはどんな人たちだろうと思っていました。そんなとき、ウィンドウディスプレイをしている人たちの姿をテレビで見たのです。それを見て、自分も空間演出のデザイナーになりたいなあと漠然と思ったことがあります。今から振り返るとそれがデザイナーという仕事に魅力を感じたきっかけだったのかもしれない。

小さいころから絵を描くのがとても好きでした。また何かモノをつくることも得意でした。しかし、そのときからデザイナーになりたいと強く意識していたわけではありません。一期は、手品師にあこがれたこともありましたが、また、海外に関心があったので、四年制大学で国際関係を学ぼうと思ったこともあります。自分がどんな仕事をしたのか、はっきりと決まっていなかったというのが正直なところです。そうこうしているうちに高校3

年生となり、進路を決める三者面談がありました。そのときに、はじめて真剣に自分がどんな職業に就きたいかを考えました。そこで、自分が好きで得意なことはモノをつくることではないかと自覚したわけです。

——小さいころから、近くの工場に入りたっていたとか？

高橋 私が育った東京の墨田区には小さな工場がたくさんあり、優れた技術を持った大勢の職人さんが住んで、仕事をしています。伝統工芸の職人さんたちも多い。父も建築関係の職人です。私がモノづくりが好きなのも、そのような環境で育ったからかもしれません。

子どものころからそうした工場に出入りし、モノづくりの工程をつぶさに見てきました。そして10代の後半には、別々の工場の技術を組み合わせれば、今までにないこんな面白いモノができる、あるいはあの職人さんの技をこんな方面に生かせればもっと違った展開ができるというようなアイデアを社長さんたちに話すようになりました。業界の集まりに呼ばれ、私のアイデアを披露することもありました。そうした中で経営者の方が「それ面白いね」とおっしゃり、私のアイデアに基づいてモノをつくってくださったことも少なくありません。それでみんな

の気持ちが高まったり、喜んだりするので、私自身もとても楽しかったですね。今から思えば、企画やプロデュースをしていたということでしょうか。

——そうした経験が進路を決めるときに役に立ったということですね。

高橋 高校生のときにバブル経済がはじけ、日本全体に元気がなくなりました。墨田区のモノづくりの現場でも、活気が失われました。墨田区には一流の技術を持つ職人さんたちが大勢いるけれど、自分たちで社会にアピールするようなアイデアを考え出すことはなかなか難しい。そんな中で私にはたくさんさんのアイデアがあるのだから、職人さんたちと協力し合って、元気がなくなつた日本を何とか盛り上げたいという思いが次第に強くなりました。今までにない何かをつくり出していきたいという思いから、デザイナーという職業を選ぶことになったと言えるでしょうか。

——ファッションデザイナーやグラフィックデザイナーというように、デザイナーは分野が限られているのが一般的です。高橋さんは、分野にこだわらずお仕事をされていますね。

高橋 そういう意味では、私の手がけていることは、いわゆるデザイナーというイメージとは、少し隔たりがあるかもしれませんが、依頼される仕事は



高橋さんは、自分の個性を表すのではなく人の立場に立ったデザインをモットーとする。

様々です。シャンプーやリンスのパッケージデザインもあれば、催し物のポスターもあります。空間デザインもあれば、美術館のガイドブックもある。また墨田区の街づくりの構想にもかかわっています。いずれの場合も、基本にあるのはデザインを通して社会の問題を解決し、幸福な未来につなげたいという思いです。

デザイナーという自己表現や個性を重視した作品をつくるというイメージがあるかもしれませんが、私は自分の作品で自己表現をしたり、個性を表したいとは全く思いません。私の作品

は、手に取ってくださったり、見てくださったりする方々のもんです。その方々の役に立つものでありたい。いつもそう考えて仕事をしています。人の立場に立つて考えること、それが私のデザインです。

デザインだけで 仕事は終わらない

——お仕事を進めるときに、どんなことを心がけていらっしゃいますか。

高橋 一つだけでは終わらない機能を盛り込むことです。例えばカレンダーをデザインするときも、日付を確認するという既存の機能だけでなく、それを利用する方が心を解放したり、明るい未来につながっていることが実感できるようにしたいと思っています。それには、世の中の動きを見るマクロの視点と微細なところにこだわるミクロの視点と同時に必要です。

——お仕事のご苦労はどんなところにありますか。

高橋 先ほど申し上げたように、私はデザインの力で社会の問題を解決したいと考えています。そのため、これまでにない発想でデザインをすることが多く、アイデアを提示すると多くの方が驚きます。誤解されてしまう

ことも珍しくありません。そのためクライアントになかなか受け入れていただけず、苦労します。そんなときはデザインのコンセプトを丁寧に説明し、自分を信じていただくように努力します。私の仕事は、そうしたことの連続ですね。

——喜びや面白さを感じるのは、どんなときでしょうか。

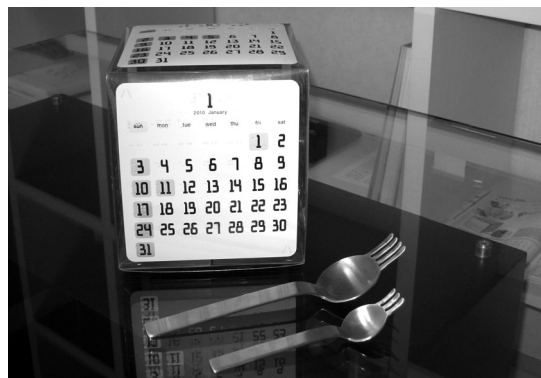
高橋 私はデザインができるまで、あるいはモノをつくるまでを自分の仕事とは考えていません。大切なのはその先であり、自分のデザインが世の中に出て、社会の動きとどう結びつくのかをいつも注視しています。私がデザインしたモノを多くの方が受け入れてくださり、社会のなかで機能し、人々の役に立っていることがわかったときはとても嬉しいですね。そうしたとき、昨日までと違った世界が形成され、自分がイメージした未来が現実を展開していることを実感します。

——若い人たちがなかなか仕事に就かなかったり、就職してもすぐに会社を辞めてしまうという傾向が問題視されています。どのようにお考えでしょうか。

高橋 そうした若い人たちは、仕事での自己表現を求めているのではないのでしょうか。しかし、仕事で個性を発揮し、自己表現するのはそれほどたや

すいことはありません。

デザイナーという仕事は、一般に自己表現ができたり、個性が発揮できたりして「かつこいい」とか「素敵」だとか思われているかもしれませんが。しかしデザイナーも、他の仕事と大きな違いはありません。自己表現や個性とは関係なく、まずは働いてみることに大切ではないでしょうか。そして10年以上たつて、仕事について自信を持つて語ることができるようになったとき、はじめて自己表現ができ、個性を発揮できるのではないかと思うのです。仕事の楽しさとは、問題を乗り越えたときにはじめて味わうことができるものです。それを味わう前に仕事を辞めてしまうのは、とてももったいないのではないのでしょうか。



高橋さんの作品。視覚障害者も健常者も共に利用できるカレンダーキューブと麺を食べるときに一緒にスープも飲めるラーメンフォーク。